

日蓮主義研究者の絶好資料

日蓮 天晴會講演録 第貳輯

本書の内容

- ◎日蓮上人の尊容に就て……………竹内久一君
- ◎日蓮上人の勤王に就て……………鷗田堯惇君
- ◎天晴地明……………本多日生君
- ◎富士五山に於ける眞蹟對照の實歴……………稻田海素君
- ◎非律賓の宗教事情及米國の教育主義……………井上長生君
- ◎靈格日蓮の愛國心……………陸軍大佐子爵 小笠原長生君
- ◎日蓮上人の筆蹟に就て……………海軍總監僧正 野口日主君
- ◎日蓮主義と細民救済……………法學士子爵 五島盛光君
- ◎將來の宗教としての日蓮主義の各方面……………「日蓮主義」編輯長 山川智應君
- ◎高山樗牛と日蓮上人……………東京帝大教授文學博士 姉崎正治君
- ◎佐渡前佐渡後……………「妙示」日蓮主義主筆 田中智學君
- ◎宗教的訓練……………東京帝大講師文學士 小林一郎君
- ◎日蓮主義と實生活……………大僧正 本多日生君
- ◎迫害に對する日蓮上人の態度……………東京帝大講師文學士 小林一郎君
- ◎日蓮上人の信仰……………大僧正 本多日生君
- ◎佛界緣起論……………宗務總監僧正 野口日主君
- ◎世界統一は誇大妄想なる乎……………宗務總監僧正 野口日主君
- ◎織田信長と日蓮宗……………東洋大學講師 高島平三郎君
- ◎日蓮主義と日本君臣の大義……………顯本宗大學林教授 辻善之助君
- ◎日蓮上人と源光國公……………顯本宗大學林教授 關田養叔君
- ◎寛政……………「村雲婦人」主筆權僧正 松森靈運君
- ◎西人の法華經觀マスタリオヴアリツ……………海軍大佐子爵 小笠原長生君
- ◎日蓮主義と大鹽平八郎……………日宗大學長僧正 柴田一能君
- ◎軍隊教育と日蓮主義……………日宗大學長僧正 鷗田堯惇君
- ◎身延記を拜して……………近衛第一旅團長陸軍少將 林太郎君

發行所

東京市淺草區南松山町二九法成寺中
取次販賣所 東京市淺草區北清島町一四(振替口座東)

天晴會事務所

團

統一

第百九十八號

本佛の大慈を渴仰せよ
大僧 正本多日生師
日蓮主義より觀たる婦人の地位
子爵海軍大佐 小笠原長生君
忠愛心の養成と日蓮主義
女子大學講師 高島平三郎君

〔菊版五號活字十四行三十三字詰六百頁張假名附
裝釘總クローム金文字入御眞蹟其他寫眞數葉挿入
◎正價金貳圓五百部限リ特價金壹圓五拾錢
◎送料内地拾貳錢、清韓卅五錢、臺灣、參拾錢

日蓮上人云く

予が法門は四悉檀を心に懸て申すなれば強ちに成佛の理に違はざれば且く世間普通の義を用ゆべき歟

本佛の大慈を渴仰せよ

大僧正 本多 日 生 師

東京は文明の中心であつて何事にも善く發達を遂げて居るのでありますが、唯此宗教上の義理を辨へて、正統なる信仰を得て居るもの、至つて甚いのは遺憾に堪えない、此缺點は蓋し説法を聽聞することが乏しい結果であらう、凡そ信心を生ずるのは教を聞くからである、然るに東京には寺院も檀信徒も多くありながら法を聞くことが少ない例へば益施餓鬼會などに説教をしても聽く者は僅かである、是は僧侶の熱心も足りないが、主としては東京の人が聞法の精神に缺乏して居るのが原因である、今日來會の方々は佛法に縁のある、そうして信仰に進むべき下地のある人ではあるが、併し一度二度で深い佛教の義理などの解るものではないから、今後心懸けて來聽せられんことを切に希望して置きませす、さて今日は人間として最も大切なる心得とは何であるか、といふことに就てお話をしよう。戦

争のことで諸君も既に知つて居るのであらうが、己を知らず他を知らずんば百戰百敗すといふことがある、人が世に處して行くにも先づ自己は如何なるものなるかを自覺し、更に世徳の真相を了解せねばなるまい、悉く謂ふと或人は、我輩は古き江戸時代からの世狀を知悉して居ると言ふであらうが、安知して今日の所謂社會觀人生觀は肉眼で知り得るやうな皮相なるものではない、人は唯生れて飢ゆれば食ひ寒ければ衣るといふ丈けでは生を受けた甲斐はあるまい、其よりは凡人として知らざるを得ないものがある、其は抑も何であらうか。

人といふ人には誰にも善と惡との二方面を併有して居る、御覽なさい、非道の惡人と雖ども其子に對しては無限の慈悲を有つて居る、反之善人とても瑕のないものは無いではないか、近く自分を省みても善惡兩方面のあることは直ぐ解る、儒教に於ては之を明德と物欲との二方面ありと謂ひ、佛教では佛性と煩惱とに分ける、此は恰も七面鳥が一つの顔に種々の色を現はす

が如きものである。

そこで一寸考へると人は美衣美食して且つ蓄財でもあれば、以て自ら足れりとして居られるやうだが、必ずしも左様でない、鳥や犬は食ひ度い時は食ひ遊び度い時は、池の邊にでも築山にでも自由に遊べる、けれども人は食ふにさへ事を缺く時がある、さればとて鳥や犬には成り度くもない、蓋し是れ人には尊き道義的感情があつて、互に人間らしい心と心と相通ふ處に生命を宿して居るからである、夫婦兄弟隣人にも互に此心を通じ合つて居る、これが若し不倶戴天の仇敵でも同様して居るのなら、片時たりとも安心して居られないが、今私が斯く講演して居るのも豈夫狼や狐が話をするのではない、と始めから思へばこそ聞きに来る氣にも成れたものである、是れ即ち道義的精神がお互に通つて居る證據である、尾上岩藤の芝居のやうに、衣服の爲めには岩藤の方がよいが道義的感情の上からはお初の方が同情が集まる、其衣食に拘らずお初の方が可愛いといふところに人たるもの、美點はある餘り直接に餘るかも知れぬが、總體財産家の檀那衆とかお殿様とかには疇癪持ちが多くて、何彼に就けて一も二もなく始終疇癪を起し通し當り散らすから、表面では金と地位の爲めに、檀那様とか殿様とかと奉られ居るが、露では三太夫などが胡魔化しのみを謀つて居て、誠意からの尊敬だの親切はないから何の恩めもなく、不愉快に其日々を送つて終う、是れ皆人生に彼の温かき道義心を捨て、財と權利とで活きんとするから、冬の木枯の如き落莫たる悲境に陥るのである。

されば人は須らく温き精神の涵養に志さねばならぬ身は哀れ憐い位置に居つても、自らは尙人に對する憐愍の情を失はぬやうにせねばならぬ、佛陀は己れ病みて佛に祈るものよりも、病みつつも尙人の病めるを憐む人をば憐み給ふて救ひの御手をのべさせらるゝ、強ちに佛に祈る人のみが貴いといふものではない、例へば子たるものが、親であるから我を愛し玉へといふものよりも、私のやうな不肖をも尙親は保育し玉へりと

ではないか。

唯單に銀行の金のみを以て人間一生の價値を計らうとするは淺幕である、佛は人は或點までは皆同じ如くに見えろが、一度反省の心が起きて、過ぎ越し方行く末のことなど心にかゝる秋は、凡人の多くは其假面を剥いて精神の有の儘を露出すれば、皆美衣美食の爲めといふ卑い心のあることを自覺する、之を自覺した時は道義的精神と衝突して、自ら無量の悶之に苦むと仰せられた、昔から人物とも謂はれる人は數々此煩悶の關を過ぎて居るので、普通の人とても一生に一度は必ず逢着する、所謂斷末魔の苦とは此事である、如何な悪人とても死際には現はれるので、其苦みたるや二三時間であつても、本人にとつては永劫の痛苦を感じて居る。

其他憚る内界の苦でなくして外界から苦しめらるゝこともある、若し自分の身勝手計りを考へて居ると、親類や夫婦の間にも不和が起る、況んや他人からは同情を失ひ出入の人々からは怒まれるは必然、諸君には其慈悲を感得するものには親の愛は一層加はる如きものである、先比の社會主義者の如く、徒らに天下を呪ふたとて眞の同情の聚まる筈はなす。

さて此温き性情を養ふには、今日は種々の精神科學が発達して居るが、我國には古來神儒佛の三道があつて、何れにも必ず探るべき一致點が存して居る、さきに天下を騒がしたる正潤問題に就ての神器、彼の神器は人の徳を表はしたもので、鏡は人心の私を去り何物を映すにも有の儘にうつすことを意味して、他人の言葉を聞くにも息が曇つて居る時は正しいことでも邪にとる、自分の好きな人の話となると、間違つて居ても是なりとし、憎い人の談は正しいことでも邪だとする、此弊は婦人に殊に甚しく公平を保つことは其最も難しとする所である、だが此所が極めて大切なる點で、維神の道では自身の心をば明鏡に照して眞直に清く公明正大を得んとするのである、神社の拜殿に鏡の安置してあるのは即ち此意味の教訓である、次に玉の表はす徳は柔順で、善には素直に隨ふべき教訓である、温乎

として玉の如しといふ形容詞さへある位である、つきに劍は果斷を表して居る、何事にも決心は大切で、假令困難はあらうとも進むべきに進むことは、嘗て男子のみならず女子にも最も必要なことで、逡巡躊躇することは愚痴の極であらう。

日本古來の武士道は婦女と雖ども爲すべきことは必ず成し遂げる、真夜中に子を負ふても行くべき所までは必ず進むといふのが其精神である、其れを何うです取捨去就などに迷つて他に相談をして、偶々失敗した時には人を怨む、怨む位ならば相談をせぬがよいではないか、相談をした位ならば其言に随つて其成否によつて怨むなどはせぬがよい、是果斷がないからである、さいか、東京に賣卜の流行するのは恰も其様な人の多い事を示して居る、人苟しくも平素から善き教を受け、訓練を怠らなければ、何事に遭遇しても即決斷行し得るもので、何目でも其善惡を考へて解し得られない事はない、頭を切られんとしても、踏むべき道を踏むべきは、思はば、畏るゝこともなければ悔めることもな

に義あるに至る、其方法は大學にも所謂「如切如磨如琢如磨」とあるやうにすればよい、切るのが如くとは例へば象牙を切るにも細密な注意が要る、折れぬやう曲らぬやう、而して後に光澤をかけるやうにせよといふので、如琢如磨とは例へば玉を圓く作り上げるにも激し過ぎても瑕がつくから、これもまた全心の注意を集めなければならぬ、其やうに各人天賦の明德を磨くには精のある限り盡さねばならぬといふことで、又此明德を擴げれば仁愛とも智勇とも活現する、之を細かに見れば萬徳具はらざるなしといふので、大學には悉く分個分とも形容してある。

併したゞ論語や大學を讀んだだけでは修養は出来ない、此上に天を畏れて慎まねばならぬ、然れば則ち至誠を得ることが出来る、中庸に「誠者天之道也」とは此ことである、即ち天の道たる誠を享けて、自己の努力と共に明德を明かにせんとするのである、管公の「心だにまことの道にかなひなば前らずとも神やまもらむ」といふ歌は、儒教と神道と結び付けられた所謂和

い、寒の／＼と寒さに恐れるよりも、寒さに堪え勝つべき決心を以て體質を鍊へて置けば、其方が着物を重ねるよりも淺き易いやうなものである、即ち決心は大切である。

以上此等の三徳を研くには自分の力のみでは足りないから、神の聖明なることを信じて其補けを得なければならぬ、天地の間には神明の御坐しまして我心を透察します故に、外には現はれて居ないでも内に邪心あれば少なくとも神前では偽ることは出来ぬ、人又神を知ることがなければ自惚高じて、いつでも自分は善い他は惡いとして心の曇りの邪僻を去ることが出来ない、けれども神のましますことを知るものは自己の小邪なることを知つて、益努力を加へて彼の三徳を成就することが出来るといふのが即ち神道である。

次に儒教では、誰人にも明德でふ尊いものを享有して居るのであるが、物慾の爲めに其明珠を曇らされて居る、であるから此珠を研磨して物慾の曇りを除かねばならぬ、除けば則ち夫婦相愛し、兄弟は常に、君臣

魂激才であるが、大切なのは三十一文字の「かなひなば」といふ點であつて、吾人は萬世を一貫せる天の道にかなはんことを之れ勉めねばならぬ、然るに此天を畏れず道を慎まざるものが今日の教育を受けた人に多いのは慨嘆の極みである、彼等は佛教で謂ふ所の斥ふべき世智辨相ではあるまいか。

また「使天下之人齊明盛服以承祭祀」洋を乎如、在「其上」如「在」其左右」と中庸にはあつて、天を祭るに己れの左右に天降りませるが如く畏敬する、此畏敬に明德を磨き得る力が潜んで居る、我國には古來床の間があつて今日では餘り大切にもしないやうに成つたが、昔は此處に銘とか訓とかの軸を掛けて修養の資とし、人をして自然に頭の下らざるを得ないやうになつて居つた、然るに現代では怖いものは法律と巡査と云ふ風になつて終つたから、其目其綱をくやつて悪事を働さ、だん／＼自分の價值も墜ちる計りである、人に畏敬獨愼の心だにあるならば邪念の起るものではな

更に佛教ではなほ精細に、人には佛性とて佛と異らざる性質を固有して居る、儒教に明德神道に和魂ありとは言ふが、未だ漢として明確ならざるものである、けれども佛教の佛性は何れの方面からも究め盡したもので、今暫く之を説明して見ようならば、先づ解脱相といつて、人の心中を視透すに各未だ實現して居ない善心がある、此善心は迷妄を離れて智仁圓滿なるものに向上せんとする精神である、之れあるが故に他人から貴様は馬鹿チヤと罵られでもすると、ナニツと反抗する是れ向上心に外ならない、今佛陀を拜し奉るに慈悲圓滿にして、智は天地を觀、慈は法界を蔽ひ給ふ、所がこれが吾人の精神中にも存在して居るといふのである、次には壽命の無限なることで、今日は哲學に於ても人の不滅を立證して居るが、これは必ずしも宗教や哲學に來らずとも物質界を觀ても判明すること、變化はするが滅びはしないことは真理である、故にまた新に生ずることもなく無始より存在して居る、人には即ち此不滅不造の壽命を有つて居るのは明かである。

懸けねばならぬ。

三寶を信ずるとは佛法僧に歸依すること、日本人は三寶といふ言は知つて居るが其實を知らない、法華經の毒量品には「阿僧祇劫を過ぐれども三寶の名を聞かずと仰せられたが、寔に富士や日光を見なかつたとて人生に何程の關係があらう、なれど無始已來吾人を救済せんとし給ふ三寶の御名をだに知らぬとは、不知恩の極み耻しい次第ではあるまいか、此頃の人は佛様とは如何なる方であるかといふことをだに知らず、甚しいのは位牌を以て佛だと思つて居る、解らないにも程がある、今單に佛様といへば釋尊を謂ふこと、極まつて居る、他に藥師だの彌陀だのと名はあるが、これは釋尊が説法中の言は、架空の佛に外ならない、此世界には唯一釋迦如來あるのみで餘佛は存しない、そして釋迦牟尼佛たるや前述の如く智も慈悲も鴻大にましまして、其昔、人として涅槃は示されたが尙御本體は常住にあらせられ、今日もなほ晝夜に吾人を衛らせ給ふて居る、且つ日蓮上人を遣はされた如く偉人を此世界

如斯佛性ありと了覺した上は、活きて闇黒の中に處るのは誰しも苦しいから地獄や餓鬼等の世界に墮ちることを避けようとする、之を遠離相といつて惡は爲たくて爲るのではない皆遠離せんことを努めて居るといふのである、又寂滅相といつて佛と成り得る萬事萬端を具有して居る、一切衆生成佛せざる無しとは之れ有るが故である、併し此所に一點注意して置くことは此佛性の寶珠を本來具へて居ながら、玉かけながら迷ひぬるかなの歌の如く其を自覺して居ないことである何と淺猿しいことではないか、寶物の溢れて居る庫藏を所有しながら使用することを知らぬとは實に以て憐いことである、晦日に月は無いのではない、人は月が見えないから無いと思ふかも知れぬが然らぬやない、三日月から追々満月と成るまで又闇の夜も、たい月が隠れて居るか或は其體の全部を現はすか現はさないかまでのことで實體は同じである、人心亦之に異なることではない、吾人は其迷雲を拂つて佛性の月を顯はすことにはげまねばならぬ、それには三寶を信ずることを心に

に派して人類を啓蒙せられて居る、されば吾人が法華經の意に従て佛様を信奉し南無妙法蓮華經と唱ふるならば、一切の真理、凡ての道の觀念皆此五字七字の中に在つて、圓滿なる佛陀は吾人を守護誘導せられるのである。

從來の日本は神國と敬稱して居たが聖徳太子より已來は、神佛の關係を闡明して一層我國體の尊い所以を發揮せられ、宗祖は「神國變じて佛國となる」、三界は皆是れ佛國也」とて神を斥けられたのではないが、なほ此國には佛の衛あることを警告された、一月萬影として愛宕の山に出て居る月は、亦墨堤の月とも三笠の月とも現はれて居るが其體は二つあるのではない、その如く西に東に出現しました諸佛は皆是れ一釋迦佛の分影に外ならぬのである。

大凡何物にも大切なることは中心である、今言つた如く淺草の月松島の月橋立の月と、月が數々あると思ふのは誤りである此月の外に他に月の有るべき所以はない、同一體の月ではあるが自分の眺める時や處に依

つて樂しくも悲しくも變るまでではないか、即ち中心を今自分に光を投げて居る月にとらねばならぬ、されば吾人は佛の中心をも此世斯教の佛としては釋尊より外に中心をとることが出来ぬ、之を是れ本佛と申し奉るので他は皆本佛の影である、若し人にして此佛を知らぬものは日本人にして至尊陛下を知らぬも同然ではあるまいか。

さて前述の如く人各々には佛性ありと自覺した所で本佛を知らねば何の甲斐もない、身はやんことなき姫君と生れても畜生に歸嫁すれば生まるゝものは畜生の子である、子は則ち利益の譬喩である、尊き佛性はあつても實體となき佛に歸依して佛たり得やうか、全體信仰には對象を擇ぶことが極めて大切で、婦女は良人の地位に隨て自分の位置も定まるが如く、宗教の信仰も本尊に因て自分の價值が定まる、即ち吾人は絶待の本佛を信するに依つて自分も亦絶待の果報を得るのである。

然らば則ち吾人は以上述べをしたる、此題目此本佛

如く明かに覺り得られる、が此教でなければ人の人たる所以も知ることも出来ず、お前は人かツと問はれてハイ人ですと答へるの鳥游の沙汰としか思はれなくなるのである、此教によりてこそ自己の眞價値を知ることが出来るのである。

あゝ身は餌に溺しても一度此教を聞き、自分の眞價のかくばかり貴いことを覺り得たならば何の悔しいこととがあらう、金錢財貨の前に頭を下げるよりは人の眞價を尊重して互に敬愛を凝ぎ合ふやうになれば、どれ程圓滿なる怡しい人生を送り得られるか測られないのである、何うか諸君、此教に従つて人生の眞意義を味はつて戴きたい。

此宗祖に歸依し奉らば、本有の善心は爲めに刺戟され開發せられ、歩一歩一日と向上して遂には佛果を成就し得るのである、之を若し我心の儘に行へば漸々に退歩するより外に道はあるまい、で此心掛けは行住座臥忘れてはならぬことである、尙一層強く言へば以上の心掛けは、聞かねば別らぬなどといふのが抑も既に間違で、人としては謙しにも必ず知つて居なければならぬ事なので、神道が一轉せば佛道となるは前述の如くであるが、少くとも其神道は日本人としては已に知つて居なければならぬ道ではないか、幸にして平素より相互が此精神を離さなければ、何事にも穩健なる調和を得、自ら徳も積まれて因果の法則は歎びの中に吾人を佛に成し遂げる、換言すれば修養の中自ら成佛の素因を得られるのであつて、之を人間開會の法門とて法華經の妙義となつて居る、恁る有り難い教であるから此心を以て見れば一切經は我一身の日記とも拜せられるので、佛の教は人生を照映せる明鏡であるから、之れに向へば自分の過去も未來も將た現在をも手に掌る

日蓮上人云く

一生の内に限りたることなれば臨終の時に至つて諸のみえつる夢も覺めて、うつゝになりぬるが如く只今みゆる所の生死妄想の邪思、ひがりの理はあと形もなくなりて、本覺のうつゝの覺にかへりて法界をみれば、皆寂光の極樂にて、日來賤しと思ふ我法身が、三身即一の本覺の如來にてあるべき也。

日蓮主義より觀たる 婦人の地位

(七月十日東京地明會に於ける講演の大意なり、而して講
題は便宜上記者の所見を以て任意に、講演中文意明なら
ざるありとせば記者の責に在り)

子爵 小笠原長生君

今日日本多上人より何か話をせよと云ふことでありま
したが、私は宗門の事は委しく調べた譯でありませ
けれども妙な因縁から御遺文を拜讀するの幸榮を得ま
したのであります、私共は職務上の關係より致しま
して忠君愛國に關する御文章は、特に敬意と注意を拂
ふ次第であります、御遺文の「八萬の國にも超へたる國
ぞかし」或は「濠洲提第一の本尊此國に立つべし」等
の大字は、目に映じまして一段の趣味を感ずるのであ
ります、が宗教の意味より婦人に對する特殊の價值あ
る觀察を有つて居りませぬ、故に今日此處に御話致し
ますことは私の觀察だけに過ぎないので豫め御承知
置を願たい。

凡そ世の中には表裏があると思ふ、表があるならば
い生涯を送つて居た譯である、故に婦人は濟ふことの
出来ないといふ地位に居つたものである、近代は女尊
男卑と云ふ様な觀察もありませんが、女尊男卑と云ふの
では正しき批判ではない、英國の家庭にありましては
婦人が外に出ました時は社會よりも亦良夫よりも非常
に尊敬をうけて居りますが、家庭に在りては少しも威
張りて居りませぬ、實に従順にして良夫に事へ親に仕
へて居る、唯だ婦人が外に出た時の態度を見て女尊男
卑の風ありと云ふ觀察を致しまするものは、未だ其眞
相を知らぬものであつて、整然として秩序が立つて居
る事を見なければならぬ、佛教に於て五障を説いて其
向上を塞いで居る様に見えるが、それは一機一縁のた
めに説いた四十二年の經文で、即ち暗黒面を示したの
で佛の眞精神でない、婦人の表の光明は極めて明晰に
法華經に現れて居る、法華經は秩序よく之を融和して
婦人濟度等特色として居る、法華經に就ては天台大師
が玄義文句に於て縱横に講論して居りますが、之によ
りて其教の高尙なることを知るけれども、いかに哲學

必ず裏のあることは當然である、晝があれば夜がある、
春去れば夏來り秋行けば冬を迎ふると云ふ工合に、一
定常理の下に動いて居る、一幅の山水畫も、眞に山水ら
しく見せることの出来るのは裏あるが爲であつて、裏
地のない表裏のない表の山水の畫のみであるならば、
一幅の山水としての體裁を爲さない、我々人間界に於
ける男女の關係の如き眞に然うである、而して婦人は
世に立つに當りて先づ此の表裏の關係を知ることが大
切である、男子の表の活動を遺憾なく遂行せしむ
るは、是全く裏に婦人のあるからであつて、裏にある
からとて落膽失望すべきでない、が而しながら婦人に
對しては客觀より之を輕視したると、亦婦人自身が主
觀的に社會の地位より遠かつて居りはせなかつたか、
明治以前に於て斯の如き傾向ありしやに考へる、則ち
儒教に「女子小人難養」と云ひ、佛教は五ツの障りと云ふ
事を説いて、是は共に婦人の弱點を擧げて輕視侮辱し
て居るので其人格を尊重されて居ない、婦人も亦自己
の地位を輕んじて何等の修養を積まないで意味の少な

的に理路整然として立派でありまして、眞實に活き
た人生社會に觸れぬものは用に立つまいかとおもふ、
凡て教は理論の高尙なると同時に實際的生活上に交渉
を有つて居らねばならぬ、日蓮上人は法華經は萬古一
貫の大眞理を顯示せられてあつて、亦同時に人生社會
の上に深き交渉を有つて居ると云ふ着想徹底より致し
まして、統一的開顯的の解決を與へて、直ちに經典の
意義と佛の精神を現實界に活用したので、則ち自から
法華經の行者と云つたのではあるまいか、また提婆品
の龍女の成佛を玉と見たるが如きは生きた社會に沒交
渉ではあるまいとおもふ。

世の上人を論ずるものは悪口を言ふから嫌だと云ふ
が、上人の四箇の格言は念佛眞言禪律の四宗が代表と
して批判せられたので、斯の如き佛教は當年甚しく國
家の中毒であつた、日本思想界は危かつたと思ふ、此
時に當りて上人が四箇格言を疾呼したのは、日本國家
に對して非常なる良藥を與へたのではあるまいが、鎌
倉時代は佛教と稱するものは盛んであつたが、國家と

云ふ觀念が明確になつて居らなかつた、外來の文物を輸入するのは結構であるが、直ちに支那の禮儀を採用して日本の禮を捨て、敢て省みず、専ら支那思想の普及にためて日本の生氣を消耗しつゝあるが如き状態であつたのは事實である、故に上人が大聲疾呼して根本より警覺を與へ、さらに法國冥合の大理想に立つて日本の生氣を發揮するに努力したのは眞に法華經の行者である、上人は

宮仕を法華經とおぼしめせ

と云つて、法華經の修行なり女性觀は皆之より言ひ現されて居る、婦人の裏の方面と表の光明面とを適當に融和して其特性を發揮せられて居ります、富木尼鈔に於て

男のしわざは女のちからなり

と云つたのは非常の力である、男女同權女尊男卑と云ふ人の如きは女の方が女の方なりと云ふのであつて、家庭の意義も自己の地位も考へざる浮説たるを免れぬ、さらに極論すれば男女の關係を無視したる妄論で

ある、上人が男の仕業は女の力によりて仕遂げらるゝと云ふは内助の力と効とを認められたのであります、兄弟鈔に

女人となる事は、物に隨つて物を隨へる身也

と云ふ文字は恐らく世界格言中にあるまい、斯様に婦人は法の上より貴とときものと見られて居る、法滅盡經の中に、釋尊が愉快なる御姿にて光明を放つながら、縱横に快辯を振ふて説法せられて居つた、阿難の間に答へて説かれしことを拜讀するに、我法滅後に滅すと末世の僧俗の淺聞敷きことを説かれました、從來此經を讀だものは少なかつたが、上人は能く之を引いて僧俗の横着なるを責めて居る、此經には僧侶は沙門の地位に在りながら反て魔事を行ひ檀徒もまた何等の力がない、従て僧侶に對して敬意を表するものがない、其の澆季の時婦女によりて此經を持たるゝべしとて大に婦人を賞讃して居る、此經には、此法滅せる時精進するものは女人也、男は輕慢にして沙門を敬せず、之を見ること糞土と異なるなし、亦信心あるなし、男は天

死して精氣を存せず、獨り婦は百歳に至らん、と説かれてある、法の衰へたる時婦人の力に憑るもの多しとて之を賞揚し其責任を重きしむ、若し斯の如しとせば、現代の如き最も功德を積むべき時機であるとおもふ。

我が佛教には女人を成佛の出来ないものであると言つてない、勿論法華經以前は世の中の婦人を否定して暗黒面を説て居る、法華經は善き方面を説てある、總てのものを融通して居る、法華經に

如風於空中一切無障礙

と云つたのは、宇宙萬法に於て風の障りないが如く、理想と實際、淨土と世界、宗教と教育とが打て一團となりて居る、則ち統一主義であると思ふ、そうして婦人は極めて愉快に融和せられて其立場は光明が輝いて居る、是は體道の方面であるが、差別的方面に於ては物に隨つて物を隨へる也と云つて、其地位と責任とが明かになつて居る、是は餘談の様であります、私は故奥村五百子とは懇意でありました、あの婦人が愛國

婦人會を組織して現今は八十萬の會員がある位であるが、女史に對して觀察せば非常の根底を持って居る、朝鮮に實業學校を建てた上に滿洲に渡りて各地の寺院を訪問した、それはいつ何處の地に斃るゝとも必ず阿彌陀佛に救はるゝと云ふ信仰上の根底からで、其信仰は間違つて居りましたが、壯快なる働きを致しました、私は始め佐世保で會つたのですが談話の如きは随分優さしくはなかつた、けれども日清戦争の時の如き家族が眠りに就いた真夜中頃、蚊屋からソツト出て佛壇の前に端座して外征軍の武運長久を祈りたと云ふが、いかに優さしい心根ではないか、亦女史の友達が病に犯されて命旦夕に逼つて居るのを見舞ふたとき、醫師に全快するか否かを尋ねたが、快方は保證が出来ないと言はれて聲を上げて泣いたと云ふ事である、世人は多く女史の表の行動を見て婦人の本領を打捨てたが如く評論するが、仔細に女史の生涯を調べて見ると、優さしい美はしい婦人の特性は遺憾なく發揮されて居るとが解る、日蓮上人が

若法門の爲には夫に殺されても

と申されましたが、是は氣節の大切なるを訓戒せられたので、其信仰を動かさぬこと法門を守ると云ふことに於ては、大義を心得て置かねばならぬものと示されたこと、おもふ、孔子は「有收歿臣事有盜臣」と言つて、賄賂を收受するものよりも寧ろ物を盗む一輩が御し易し」と云つたが、是は其強きを違へて道の大事なるを言ふたのであります、婦人が其妻として夫に従ふは其地位であり義務でありまして決して抵抗すべきものでありませぬ、上人が婦人に對して物に随ふと仰せられた其範圍は至誠である、至誠は總ての人に大事である、私共は軍隊に居りますが、勅語を拜讀致しするに忠節武勇等の精神を貫くには、至誠を第一とすと仰せられてある、至誠の缺けて居る嘉言善行は一種の裝飾に過ぎないので、砂上の建物の如く忽ち潰れて了ふ、勅語には心だに誠あれば何事も成るものぞかし、至誠は天地の公道人倫の常經なりと宜べられてある、至誠は斯の如く大事である、然うして之を養ふべしと

が、一人の兵士は士官が浮袋もないのを見つけて之を渡さうとしたが、士官は己れは宜いから御前は之によりて一命を助かれよとて敢てとらなかつた、それでも兵士は士官の一命を助けばやと思ふて浮袋を渡さうと四たびまでも逼りたが、士官は之を肯けなかつた、が其内に船艇が来て助けたと云ふ事がある、此時であつた、其時は船も沈み人も亡くなつたので、内地の人は海軍力の沮喪を杞憂して一敗して挫ける勿れとて堂々たる論文を送られたが、泣かしむるほどの感とを與へなかつた、が一枚の女文字の端書は全艦隊員をして男泣きに泣かしめた、其文面は東郷さん身體を大事にして下さいと云ふのであつた、多数の兵士の戦死は悼ましい事ではあるが、尙ほ東郷大將の健在して居るならば最後は勝利を得ると云ふ至誠の突破したもので眞に士氣を鼓舞するの力がある、人を動かすこと大なるものである、故に至誠がありますれば、人も動き自分も功德を積むことが出来る、是は空間の感應とも云ふべきであります、私が日清戦争の時軍艦高千穂に乗りて居

云つた處が、現實に人間社會に於て至誠一貫の行がなければ何等の價値がない、上人が宮仕を法華經とおぼしめせと言はれたのは、高尚なる法華經をして直に人倫の上に適切に實行せられたのであつて、理想と實際との關係はよく融和せられて居る、亦淨土と世界との問題でありまして、極樂が行つたさきならば人生に價値はない、例へば東京人が田舎へ行つて歸つて來た時に、都の繁昌も田舎の趣味も能く諒解する様な譯合で、人生社會を捨て、何等の交渉もない極樂往生は採るべからざるものである、勿論斯かる極樂は誰しも望む所でない、上人は高遠なる法華經を信仰の方によりて實際社會の生活行爲に應同し融化したのであつて、正しく價値はこゝに存する、そうして終始至誠を以て貫いて居る、至誠がありますれば必ず人を動かすことが出来る、日露戦争の當年諸姉が御記憶になつて居りましたように眞に悲壯沈痛なる話しがある、五月七日に日本艦隊が六七艘沈んだことがある、艦が沈んでから兵士は浮袋を命の便りとして波浪に揺られつゝあつた

つたとき、一兵士が婦人の手紙を見て泣いて居つた、私は未練な醜狀をしてはいかぬと死りつけて其手紙を見ました處が、醜い手紙ではなくして田舎の母よりの手紙である、その中に御身はこの前の戦に出なかつたが、今度は乾度出陣して潔よく立派に戦死する程の働きをして呉れ、母は神參りをしてこればかりを祈りて居ると云ふ文面であつた、私も艦隊の士官も皆泣きました、私は之を雜誌に載せましたが後に文部省の教科書に編載せられて居る、また兵士は恩賜の煙草は飲みません時々恩賜の文字を拜しまして聖恩の鴻大なに感泣したのである、もう少し申すならば、軍艦日進に川上と云ふ兵士がりましたが、姉よりの手紙に我村より出征したるものは御身のみである決して卑怯の振舞あつてはならぬ、敵の首を斬つて土産とせなければいけないと云ふ事が書いてありましたが、この屏弱はさ女の身にて敵の首を斬て土産とせよと祈るが如きは、眞に至誠の溢れて文字となつたものとおもふ、されば弟の川上兵士は能く働いて殊勳を掲げたが、是

れ神秘的な作用であつて大善智識である

法華經に云く

善智識は是れ大因縁なり、所謂化導して佛を見阿耨多羅三藐三菩提の心を得せしむ

御遺文には

一句も神に染めぬれば威く彼岸を資け、思惟し、修習すれば永く舟航に用たり

とありまして聖訓の旨趣を色讀することが大事でありませ、或人は上人に歸依せずとも解ると云ふが其れは間違て居る、

法華經には

法師に親近せば速に菩薩の道を得ん

と宜べたまふてある、佛種は固より本有より具へて居ると云ふことは方便品に説いてありませ、其合された分子が發展して行かなければならぬ、一念三千と云へば哲學的で六ヶ敷いが、生存競争に打勝つて佛性を發展して醇化して了ふ、其佛靈化したときが成佛であるとおもふ、かゝる境涯に到るには何うしても善智識

忠愛心の養成と日蓮主義

(神田一ツ橋學士會に於ける天晴會例會講演)

高島平三郎君

私はこゝに掲げました講題に就て考へて居る所を述べて見ようと思ふ、我國では國民の皇室に對する忠愛心の存在して居るのが、其特色として世界に誇るに足るのでありませ、この頃外國人は盛に此の點を取調べて居る、米國の如きは忠君愛國の哲學を大學の講座で講じたり、國旗を禮拜させたり、又た神に禱りをしてから鐵砲の訓練を遣る様にして居る、然るに忠君愛國の本案本元である我日本に於て何たることである、口にするに汚れたる痛恨事の發生して、北條義時以上の亂暴を爲すものあるは何う云ふ譯であるらう、彼は一種の精神病者で氣狂であると樂觀するものもあるが、斯かる思想は突然に發生したものでない、世の中の不安は淺間山以上である、實に之を思ふと胸がつまる様に覺ゆるのである。

に依りて研究することが大事である、而して佛性が開發せらるゝならば、則ち物を隨へるものであると信じまする、終りに臨み諸師の精進の修養と實行とを切望する次第であります。

日蓮上人云く

男は柱の如く女は桁の如し、男は足の如く女は身の如し、男は羽の如く女は身の如し、羽と身と別々になりなばなにを以てか飛ぶべき、柱倒れなば桁地に墜ちなん、家に男なければ人にたましるなきが如し

忠君愛國は理屈でない、君に對し國に對する同情である、君の御心を自己の心として考へ奉り、自己と國家と合體するところに忠愛心は起る、同情は物の心を酌み取ることであつて、苦樂の境遇共に起るものであるが、特に苦痛困難に會するときは同情の起り易さもので、得意の場合には却て反情を起すのが人間の常態である、砲兵工廠の附近の富士見樓が其川岸の方へ金網を張りてあるのは、労働者が樓上の紅燈綠酒の遊興を見て、悶々不平の情に禁えんで磔を投げ付けるからである、苦樂共に同情するのは是は佛性の現はれで、親子の關係は亦然うでなければならぬ、然うして君臣の關係が正しく親子の様になつて居らねばならぬ、然るに小人は人の美を歎ばずであるから自動車で乗り廻はすものを見ると、何に生意氣なと云ふ感の起るのが多數の人の常である、だが忠愛心はこの多數平凡の結合であるから大に注意せねばならぬ、この事實から考へるのに、皇威振はず國家の滅亡せんとする時などには熱烈なる忠愛心が湧いて來る、彼の楠氏の社を拜

しても今の湊川ではソーでもないが、昔の荒れ果てた
 苦蒸す有様を見ては、貝原でなくとも光圀でなくとも
 無限の感慨が起らざるを得ない、日本の今日は、今上
 陛下が京都に在す時とは大に違つて、皇室は益々御
 盛大に赴き、國權は彌々伸張されて行くのは國民の齊
 しく喜ぶ所ではあるが、從來の忠愛心は、皇室式微國
 運衰頹の消極的時代に興起したのであつて、積極的場
 合ではなかつた、今日では日清日露の兩時代に較べる
 と忠愛心が薄らいだ様に見える、現に日清戦役の時に
 は何等反對の聲を聞かなくなつたが、日露の戦役には「國
 民は義務の爲に戦ふのだ」と云ふ議論をするものさへ
 出た、日本の今日は得意の時代である、國民道徳は此
 時代に於て教育しなければならぬ、今日は實に恐るべ
 き危険の暗流が一面に横溢して居るのであるから、忠
 愛心を養ふことは尤も今日の急務であると思ふ、忠愛
 心養成には實行方面と思想方面とが適當に融通しなけ
 ればならぬ、之に就て日蓮主義は甚だ適切であると思
 ふ、今養成の方法について考へを述べますれば、實行

とになつて居る、尊敬の心には嬉しい難有いなどの積
 極的の親みがなくてはならぬ、形式に昵まないで一袋
 のお菓子でも眞に天子様から戴くだとの考が起る様に
 せねばならぬ、また行幸啓の際などにも官吏が小節
 に拘泥して國民の反感を催させる事がある、陛下は國
 民の權利を尊重し給ふのに、學生を泥田の中に整列さ
 せて奉迎した學校もあるやうな譯で、實に愾慮に反す
 るものと思ふ、是等は一小小事に過ぎない問題の如く
 考ふるものがあるけれども、この一些事が萬事を害す
 る、僅かな小感情は恰かも酒のものとやうなもので、
 それが大に醜酵するのであるから、私の希望としてし
 ては、教育家や宗教家にも宮廷の拜觀をも許し、所謂
 衆と共に樂むの風習を作りて大いに皇室の尊嚴を一般
 に示したい、私は家庭に於て兩陛下の御眞影父母の寫
 眞を子供に拜ませて、天子様お早やうと云ふ風に遣ら
 せて居る、雑祭の時なども其前に子供を集めまして、
 色々の話をし供へたものも一處に食べたことである、
 私は現實に陛下皇室の尊さ難有さを小供の心に植ゑつ

の方面は、忠君愛國の精神は決して冷かな理屈では起
 らぬ、勿論其背景としては理論を要するが、所謂潜在
 意識の理屈は暫く措て日々の行爲の上に付て忠愛心を
 養成すべきである、人は或る意味に於て習慣の結晶で
 あるから、生前生後胎中乳房の時から忠愛心を養入を
 要する、我々は四十年來日本の難有味は理屈以上に頭
 に込み込んで居る、是は時代の空氣が然らしめたのだ
 が、今日では漸次この空氣が減少しつゝある、四海一
 家で世界より種々の善惡の思想が紛然として入り込ん
 で人心を攪亂して居る、斯かる時代に於て何うしたな
 らば、昔の人の如き自然の忠愛心を起させ得るのであ
 る、理屈だけなら外來の思想に破壊されてしまふ、昔
 は親に絶對の權利があつたが今ではさうはゆかぬ、敬
 と愛、即ち尊敬の上に親愛が伴はれ相調和して行くや
 うに養はねばならぬ、然るに小學校などの様子を見る
 と、御眞影禮拜も勅語捧讀も殆ど形式に流れ、甚しき
 は危險物扱ひとなり敬遠主義に陥つて、「君が代」も祝
 日の唱歌も、その意義は全く生徒に味はれて居ないこ

けることが大事であると信する、日蓮上人は靈山淨土
 を目前に在るものと思召して居られた、即ち一良のす
 みと申されし實感、今の世の人をして日蓮上人が法華
 經や佛を遠く餘所に拜まんで、常に佛と法華經を目前
 にながめつゝあつたやうな状態に爲たいのである。
 理論の方面に就ては、今日の思想界を支配するもの
 は箇人主義である、日蓮上人は正しき意味に於ける完
 全なる箇人主義者である、日蓮上人は箇人を尊重さ
 れた人は三千年間唯一人である、奮闘主義活動主
 義現實主義實質主義等を一身に備へられたのが上人で
 ある、其中の大主義は箇人主義と現實主義とに在る、
 世界の文明は箇人の力の認められたる爲である、人權
 保護とは何であるか、同一人權の認められたのは壓迫
 された箇人の力の認められたのを云ふのではあるまい
 か、正しき箇人主義が發達すればそれが忠愛心となる
 のである、然るに今の世の唱ふる箇人主義は全く箇人
 なるものを明了に見て居ない、唯だ一時的の本能や感
 情を基として考へて居るから、犠牲の精神などは無用

だど云ふに到るのである、人間肉體を以て我とするのは抑も愚の骨頂であつて、丈長しと雖百二十五歳まで生きたるとしても、そんなものを簡人と稱することは云ひない、況して一時の感情などを簡人だとするのは大なる誤謬である、今の人々の言ふ所は唯これのみである、抑も國家父母之等を外にして何處に簡人がある、我とはこの總てを統一する名字である、古聖賢が己を捨てよと教へたのを誤解し、之に反對して簡人主義を云ふのは誤りである、自己を尊重する所に大なる力を得ねばならぬ、上人は我れ々々と到る所に盛に我れを絶叫された、一切萬有を日蓮の一箇人に統一されたのが上人である、この發達せる我れこそは忠愛心の發動力となるのである、また日蓮上人の現實主義は、一念三千の法華經を眼前に體現する所に在る、今の世の忠愛心の養成は現實主義になつて居ない、或る中學校の生徒が自立と云ふ事を先生に尋ねると、それは大人になつてから自立するのだと答へられたそうだが、人間自から注意して人の厄介にならず人に迷惑を及ぼさな

教 報

東京天晴會

●本會例會は七月八日午後四時より九段坂上備行社に開かれた例會前より林少將小笠原海軍大佐等の名士は詰めかけられ熱熱の暑さをも忘れて現代思想の趨向を憂へ日蓮主義の卓越せる各方面について研鑽せる所見の一端を語り合ふて居るので爲に會場は何ともの一種の靈氣に充ちて氣自から爽然たるものがある幹事は開會を宣すると同時に本大僧正は前回の續講たる我邦將來の宗教と日蓮主義に就て其卓越の識見を發表すべく講壇に立たれた何つもながら縱横無碍の廣長舌を振ふて國民性の發揮は日蓮主義に依らざる可らず智徳を兼備して國家の進歩を翼賛する宗教は合理上實際の上日蓮主義に在るの所以を論明し更に世界各宗教に比較して優に卓越せるは日蓮主義なるを講ぜらるべきであつた午後七時になつたので再び總會を得て演ぶるといふ晚餐を終つてから日蓮正宗の九州總教所感があつた柴田幹事は新入會員實業家春日井鹿次郎君高野修道君護士武田良吾君を紹介し講壇拍手を以て之を歓迎し頗る盛會であつた

地 明 會

●本會は七月九日午後一時より青山の安川邸に第二例會を開いた道を求むるの志厚き會員

い處にいつでも自立がある、今こゝで自立して見よ忠義をやつて見よと教へねばならぬ、誰人でも一つの行為が忠にも孝にもなると云ふ意識をさせるのが必要である、日常の仕事が法華經となり靈山の生活であると云ふのが上人の現實主義である、今日の所謂危險思想も一進轉を與へ正しく導きさいすれば可いと思ふ、現代の悪しき現實主義は煙火のやうである、唯だ眼前の事一時の本能を充たすに醒醒して居る、たゞ間に合せ主義で一切過去の事を顧みない、家柄より芋がらなど、曰ふて居るのは甚だ危險極まる、上人は過去より一貫せる現實主義であるから常に天台傳教等を賞讃して措かない、今日の人が先輩の恩誼を顧みないのとは雲泥の差である、日本の文明には三千年の素養があつてこの現實を爲たのだから、隨て未來も頗る有望となるのである、現代の人の説く所は夢である詩である、夢や詩は實行されない、此國民道徳の危機に瀕して居る日本は日蓮上人のやうな正しき意味の簡人主義と完全なる現實主義の精神を味つて實際の上に忠愛心を養はねばならぬ、此事が尤も刻下重要の大問題であると思ふ

妙教婦人會

●七月二十日午後一時より淺草南松山町法成寺に開いた此日九十度以上の暑さであつたが熱心求道の會員は一時の苦痛を忍んで永久の生命を得るの道を開かばやと定刻までに參詣せられたので祈念法要を行ひ後本大僧正は松野尼名を拜讀して此の法華經は無量の國中に於て名字を聞くことを得べからずと云へる安樂行品の意味より説き起し巧妙なる因縁と適切な譬喩とをもちけて法華經の信に入り菩提の功徳を積むもの、果報を讚歎して益々不退轉に住すべきことを懇説せられたるがゆへ一同は暑さをも忘れて傾聴して居つたげに得難き信女と云ふべきである

法 國 會

●實業家有志の組織したる同會は連月日本橋公園に於て日蓮主義の講演を開いて外護の責を盡して居る七月例會は二十日午後七時より關田僧外一名の講師にて縱横に日蓮主義の特長を發揮し現代政治の教として日蓮主義を描いて他に存せざるを以て、其止しむ義に服せしめ感動を與へて散會したるは午後十時半であつた

國 明 會

●七月二十二日第五例會を本部に開く同日は應援會となりしを以て聽衆例月よりも多く大學林生百永義彦君は日蓮上人の生涯を通じた

はやくが如き熱熱なことを以て空室には玉島子爵夫人小笠原子爵夫人なども見られた本大僧正は大本尊の寶前に於て法華經の供養を現の祈念を修し會員一同は合掌恭敬の供養を捧げて妙法を唱へ心の汚れを清めたる後小笠原海軍大佐は饑めしき參謀官の軍服を召して壇上に立たれた面して其壯麗明快なる雄辯は婦人の地位や義務を述ふるにいかゞ温かき同情の溢るものあるかと思ひば烈烈肺腸を衝いて覺醒の警鐘を打つて感がある何へば從來は社會が婦人の弱點を捉へて其人格を尊重しなかつた罪もあるが婦人自身も亦其地位と責任の重きとを知らなかつた上人は男の仕業は女の力なりと賞讃せられたので婦人としては大に其地位を明かにし責任を盡すに於て愉快と慰安とをうくること出来るのではないかと此會に於て日蓮主義の尊さきを味ふものは至大の幸福であると云ふ論調にて一時同餘の講演を爲された本大僧正は前回に於て發心の種類及其大體を講説せられたのでさらに發心の意義を懇説し而して佛性の開發はまづ第一に感應道交の上より來るべきものであるとて各方面より感應の道理を詳論し未曾嘗の如來事每自作是念の大慈悲はみな是れ吾等の己心佛性を啓發せしめばよとの慈願に外ならぬとの法味は深く會員一同の靈性に響きを與へたことを見つけた講演の終つたのは午後五時一同は茶を飲み菓子を食べながら御教の尊さを話し合ひ歡喜は心に充ち姿に現はれ何となくさらに一段の芳容風采の高きを具へて活き活きとしたる香風の薫するものがあるやうに

●新本會 信男信女九十餘名に於て組織せらるる會社...

●新本教報 栃木地方は淫神迷信の人多くして正しき信仰に在るもの...

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候



正價三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と稱すれ此の種類數品有之候を以て一々記載する能は...

佛具卸部 通小橋西入

小賣部 同市三條 三法堂佛具陳列場

●本山妙法寺上棟式 奥州會津本山妙法寺は兵火に燬りて本堂其...

●新海教報 新潟市の有志の發起にて生れたる回會は七月廿四日東京天晴會より本多大...

●勤行作法 勤請文、受持文、○自我偽調、○正行唱題

勤行作法

右は各派統一の理想の下に本多日生師の編纂せられたるものにして、勸請文、回向文の如き最も簡潔にして而も其要義を逸せず總振假名付なれば初心の行者の所用として最も適切なるもの也...

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 妙教婦人會

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 發行所

會の式を擧げさらには大講演會を開いて現代國民の自覺を促し日蓮主義に於ては...

●新海教報 (經會議員) 島居修次郎 (經教育會長、辯護士) 宮城聖五郎 (新潟東北日報記者)...

●勤行作法 (一部代金五錢十部以上一割引郵稅四部毎に金二錢三十錢以下五厘郵稅代用不苦)

大僧正本多日生現下著

橘香集

特製皮金文字入美本
金六拾錢
並製クロウズ金文字入
金貳拾錢(郵税四錢)

本書は婦人のため起れる日蓮主義鐵仰地明會のため特に本多大僧正が法華經の要文と尊とを聖訓とを輯めたるものなれば弟子檀那は必ず先づ之を拜讀し修養せざる可らずしかも本書はポケット式にて頗る携帯に便なれば敢て之を薦むる所以也

大僧正本多日生現下講述

法華經講演集

序說
如來壽量品

洋裝美本
正價肆錢
郵税四錢

發行所

統一團

東京市淺草區北清島町十四番地

(振替口座東京二二一九)

統一



第九百九十九號

大僧正小林日至上人講演高田日暢編輯

日蓮 主義 諷誦章講義

定價一圓八十錢
特價一圓五十錢
送料十、二十錢

上等美本菊版背皮金文字三方金
什師眞績寫眞入行文平明總ふりかな

一日蓮主義は日本の靈教にして其正體を講明したるものは本書也。宗學大家たる上人が日蓮主義の蘊奥を開示したるものなればなり
一日蓮主義を眞面目に研鑽せんとするものは必ず本書を熟讀せざるべからず。而して其精神を感受すべき也

一日蓮主義者の爲に信解上の要品として一日も缺く可からざるものと謂ふべく。信行の導師たる上人が畢世唯一の告白なり茲に敢て本書を薦む

東京市淺草區新福井町三番地

發行所 顯本宗學會

播州印南郡西神吉村

關領布所 妙信寺

満足と向上

大僧正本多日生師

南北兩朝正閏辨

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

日蓮上人の至情

記

者